「新精選古典文法 三訂版」 内容解説資料

この資料は、一般社団法人教科書協会「教科書発行者行動規範」に則っております。

東京書籍「新精選古典文法　三訂版」—「新編言語文化」関連表

※「新精選古典文法　三訂版」の例文（練習問題を含む）のうち、「新編言語文化 002-901」から採録した例文の一覧。 教科書の単元順に、「新精選古典文法　三訂版」と、教科書での掲載箇所をそれぞれ示した。

1　古文入門　古文の世界へ

古文に親しむ

［竹取物語］

文法書	例文	教科書
P6	今は昔、竹取の翁といふ者ありけり。野山にまじりて竹を取りつつ、よろづのことに使ひけり。名をば、さぬきのみやつことなむいひける。	P124L7
P83	野山にまじりて竹を取りつつ、よろづのことに使ひけり。	P124L7
P86	名をば、さぬきのみやつことなむいひける。	P124L8
P90	もと光る竹なむ一筋ありける。	P124L9
P93	名をば、さぬきのみやつことなむいひける。	P124L8
P96	三寸ばかりなる人、いとうつくしうてゐたり。	P124L10
P114	今は昔、竹取の翁といふ者ありけり。	P124L7
P109	寄りて見るに、筒の中光りたり。	P124L10

［枕草子］

文法書	例文	教科書
P70	春はあけぼの。やうやう白くなりゆく山際、少し明かりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。	P125L1
P156	雨など降るもをかし。	P125L5

［源氏物語］

文法書	例文	教科書
P72	いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。	P125L6
P129	いづれの御時にか、女御、更衣あまた候ひ給ひける中に、	P125L6
P135	いづれの御時にか、女御、更衣あまた候ひ給ひける中に、	P125L6
P160	いづれの御時にか、女御、更衣あまた候ひ給ひける中に、	P125L6
P162	いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。	P125L6

［方丈記］

文法書	例文	教科書
P19	世の中にある、人と栖と、またかくのごとし。	P126L3
P76	世の中にある、人と栖と、またかくのごとし。	P126L3
P83	ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。	P126L1
P110	ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。	P126L1
P136	世の中にある、人と栖と、またかくのごとし。	P126L3
P146	ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。	P126L1
P164	ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。	P126L1

［平家物語］

文法書	例文	教科書
P65	おごれる人も久しからず、ただ春の夜の夢のごとし。	P126L6
P75	猛き者もつひには滅びぬ、ひとへに風の前の塵に同じ。	P126L7

［奥の細道］

文法書	例文	教科書
P62	月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。	P127L4
P93	月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。	P127L4
P167	月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。	P127L4

児のそら寝

文法書	例文	教科書
P41	今は昔、比叡の山に児ありけり。	P128L1
P43	し出ださむを待ちて寝ざらむも、わろかりなむと思ひて、	P128L3
P75	ただ食ひに食ふ音のしければ、	P129L5
P78	寝たるよしにて、いでくるを待ちけるに、	P128L4
P101	いま一度起こせかしと思ひ寝に聞けば、	P129L4
P108	この児、さだめておどろかさむずらむと待ちゐたるに、	P128L6
P108	「や、な起こし奉りそ。」	P129L2
P113	無期ののちに、「えい。」といらへたりければ、	P129L6
P121	「をさなき人は寝入り給ひにけり。」	P129L3
P134	「をさなき人は寝入り給ひにけり。」	P129L3
P137	「いざ、かいもちひせむ。」	P128L2
P137	僧たちわらふことかぎりなし。	P129L7
P148	待ちて寝ざらむを、	P128L3
P163	「や、な起こし奉りそ。」	P129L2
P166	「や、な起こし奉りそ。」	P129L2

検非違使忠明

文法書	例文	教科書
P127	「観音、助け給へ。」と申しければ、	P133L2

絵仏師良秀

文法書	例文	教科書
P113	「あはれ、しつるせうとくかな。年ごろはわろく書きけるものかな。」	P139L3
P148	「かうこそ燃えけれと、心得つるなり。」	P139L8

2 随筆　日々の思い

徒然草

［亀山殿の御池に］

文法書	例文	教科書
P73	亀山殿の御池に、大井川の水をまかせられんとて、	P146L1
P121	多くの銭を賜ひて、数日に営み出だして、	P146L2
P155	つひに回らで、いたづらに立てりけり。	P146L4

［奥山に、猫またといふものありて］

文法書	例文	教科書
P73	飼ひける犬の、暗けれど主を知りて、飛びつきたりけるとぞ。	P149L3
P91	飼ひける犬の、暗けれど主を知りて、飛びつきたりけるとぞ。	P149L3

［今日はそのことをなさんと思へど］

文法書	例文	教科書
P96	頼みたる方のことは違ひて、思ひ寄らぬ道ばかりはかなひぬ。	P152L2
P106	かねてのあらまし、みな違ひゆくかと思ふに、	P152L7
P106	一年のうちもかくのごとし。一生の間もまたしかなり。	P152L5
P164	一年のうちもかくのごとし。一生の間もまたしかなり。	P152L5

枕草子

［うつくしきもの］

文法書	例文	教科書
P46	大きにはあらぬ殿上童の、装束きたてられて歩くも、うつくし。	P154L7
P73	また、短きが袖がちなる着て歩くも、みなうつくし。	P155L4
P93	何も何も、小さきものは、みなうつくし。	P155L2
P138	雀の子の、ねず鳴きするに踊り来る。	P154L1
P147	をかしげなる児の、あからさまに抱きて、遊ばしうつくしむほどに、かいつきて寝たる、	P154L7
P168	声は幼げにて文読みたる、いとうつくし。	P155L5

［五月ばかりなどに山里に歩く］

文法書	例文	教科書
P146	五月ばかりなどに山里に歩く、いとをかし。	P156L1

3　詩歌　うたの心

折々のうた

［古今和歌集］

文法書	例文	教科書
P14	秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる	P167L2
P24	五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする	P166L2
P87	五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする	P166L2

［新古今和歌集］

文法書	例文	教科書
P144	志賀の浦や遠ざかりゆく波間より凍りて出づる有明の月	P169L2

古文学習のしるべ5　和歌

文法書	例文	教科書
P140	山里は冬ぞさびしさまさりける人目も草もかれぬと思へば	P174 下 L4
P142	あしひきの山鳥の尾のしだり尾のながながし夜をひとりかも寝む	P174 上 L5
P144	志賀の浦や遠ざかりゆく波間より凍りて出づる有明の月	P174 下 L16
P145	高砂の尾の上の桜咲きにけり外山の霞立たずもあらなむ	P173 上 L8

4　物語　古人の生き方

伊勢物語

［芥川］

文法書	例文	教科書
P19	昔、男ありけり。	P178L1
P40	見れば、率て来し女もなし。	P179L6
P56	白玉か何ぞと人の問ひし時露と答へて消えなましものを	P179L9
P59	女のえ得まじかりけるを、年を経てよばひわたりけるを、からうじて盗み出でて、いと暗きに来けり。	P178L1
P76	「かれは何ぞ。」となむ男に問ひける。	P178L5
P80	やうやう夜も明けゆくに、見れば、率て来し女もなし。	P179L6
P94	神さへいといみじう鳴り、	P178L8
P99	はや夜も明けなむと思ひつつゐたりけるに、	P179L2
P107	昔、男ありけり。	P178L1

P147	やうやう夜も明けゆくに、見れば、率て来し女もなし。	P179L6
P155	「かれは何ぞ。」となむ男に問ひ（　）。	P178L5
P155	足ずりをして泣けどもかひなし。	P179L7
P167	はや夜も明けなむと思ひつつゐたりけるに、	P179L2

［筒井筒］

文法書	例文	教科書
P17	男はこの女をこそ得めと思ふ。	P180L5
P52	風吹けば沖つ白波たつた山夜半にや君がひとり越ゆらむ	P182L2
P81	君があたり見つつを居らむ生駒山雲な隠しそ雨は降るとも	P182L10
P85	君来むと言ひし夜ごとに過ぎぬれば頼まぬものの恋ひつつぞ経る	P183L1
P90	この女をこそ得め	P180L5
P93	男も女も恥ぢかはしてありけれど、	P180L3
P100	筒井筒井筒にかけしまろがたけ過ぎにけらしな妹見ざるまに	P180L10
P102	風吹けば沖つ白波たつた山夜半にや君がひとり越ゆらむ	P182L2
P142	風吹けば沖つ白波たつた山夜半にや君がひとり越ゆらむ	P182L2
P147	前栽の中に隠れゐて、河内へ（　）顔にて見れば、	P181L6
P148	男も女も恥ぢかはしてありけれど、	P180L3
P148	悪しと思へる気色もなくて、	P181L4
P152	昔、田舎わたらひし（　）人の子ども、井のもとに出でて遊び（　）を、大人になりに（　）ば、男も女も恥ぢかはしてあり（　）ど、男はこの女をこそ得めと思ふ。女はこの男をと思ひつつ、親のあはすれども、聞かでなむあり（　）。さて、この隣の男のもとより、かくなむ。	P180L1～L9
P156	君があたり見つつを居らむ生駒山雲な隠しそ雨は降るとも	P182L10

◎言語活動　和歌を自分の言葉で書き換える

文法書	例文	教科書
P64	老いぬればさらぬ別れのありといへばいよいよ見まくほしき君かな	P184L4

平家物語

［木曽の最期］

文法書	例文	教科書
P9	よつぴいてひやうふつと射る。	P191L12
P43	「日ごろは音にも聞きつらん、今は目にも見給へ。」	P190L11
P81	「弓矢取りは、年ごろ日ごろいかなる高名候へども、最期の時不覚しつれば、長き疵にて候ふなり。」	P189L4
P81	中に取り込め、雨の降るやうに射けれども、鎧よければ裏かかず、あき間を射ねば手も負はず。	P191L5
P123	「さる者ありとは、鎌倉殿までも知ろし召されたるらんぞ。」	P190L12

P128	「しばらく防き矢つかまつらん。」	P188L8
P130	「御身もいまだ疲れさせ給はず。御馬も弱り候はず。」	P188L5
P149	所々で討たれんよりも、	P188L14
P163	鎧よければ裏かかず、	P191L5

5 紀行 旅の心

奥の細道

［旅立ち］

文法書	例文	教科書
P147	あけぼのの空朧々として、	P198L1

［平泉］

文法書	例文	教科書
P78	衣川は和泉が城を巡りて、高館の下にて大河に落ち入る。	P200L2
P104	三代の栄耀一睡のうちにして、大門の跡は一里こなたにあり。秀衡が跡は田野になりて、金鶏山のみ形を残す。	P199L1